

# 蘇南中だより



自己を生かす生徒  
助け合い励まし合う  
知恵を働かす  
たくましくやりぬく  
令和6年3月1日発行

## 「自分の足で一歩ずつ」

校長 今井竜生

授業や生活の中から、次のような生徒の姿を見つけました。

- 体育の持久走で、走る仲間トラックの中から声をかけつつ一緒になって伴走する姿。  
先生の「いいペースその調子」の声にも背中を押され自己ベストに向かって走り出す子。
- 怪我をして松葉杖を使っている子が送ってもらって学校へ。寒い中、その到着を待つ友達。  
到着すると、車に駆け寄りかばんを受け取って一緒に教室へ。
- 成長を語る会で1年を振り返る視点のひとつとして、支えてくれた仲間を書いている。  
そのコメントには「仲間の取り組みが自分の刺激になった」とか「あのアドバイスがうれしかった」などの言葉。

持久走の様子  
→



成長を語る会  
←

最近、読んだ重松清さんの『おくることば』（新潮文庫）に、大学のゼミで関わった卒業する学生に向けて、重松さんが伝えた言葉がありました。

僕は、人生を階段に譬えるなら、そこには「手すり」が必要だと考えている。元気なときなら手すりなくても平気で階段を上り下りできる。だが、ちょっと疲れたとき、落ち込んだとき、荷物の多いとき……手すりに軽く手を添えるだけで楽になることはある。たとえ実際に頼る機会はなくとも、この階段には手すりがついているんだという安心感が元気づけてくれることだってある。

はじめに紹介した生徒の姿は、学校での「手すり」の一例です。家族や友人、先生、周りの大人とのかかわりがその子の「手すり」となる。楽しい思い出や好きなこと、将来への夢も、その子を支える「手すり」となっているのかもしれない。周りの人や環境に自分たちは支えられているのです。私たちは「手すり」に支えられる存在でもあり、自分自身が誰かの「手すり」になって寄り添える存在にもなれる。

重松さんの文章は「ただし、手すりをつかんでいるだけでは階段は上れない。自分の足で歩くんだ」と続きます。「手すり」に安心感をもらいながらも自分で進もう！と。

わたしの中で、この言葉と、昨年度学校に来ていただいた落語家桂やまと師匠の『一歩ずつで 十分しあわせ』という言葉がつながりました。

「自分の足で階段を一段一段と上がっていこう。そこにしあわせを感じられるように生きていきたいな」

年度の節目が近づき、生徒たちは1年間の振り返りをして、自分の成長や学級の歩みを確かめています。ご家庭でも、ぜひ、それぞれのお子さんの成長を確かめていただき、「がんばってきたね これからも元気でやっぴいこうね」と声をかけていただけるとありがたいです。保護者の皆様、地域の皆様には、今年度も学校の教育活動に対して、ご理解と温かいご協力をいただきましたことを改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。次年度もどうぞよろしくお願いいたします。